

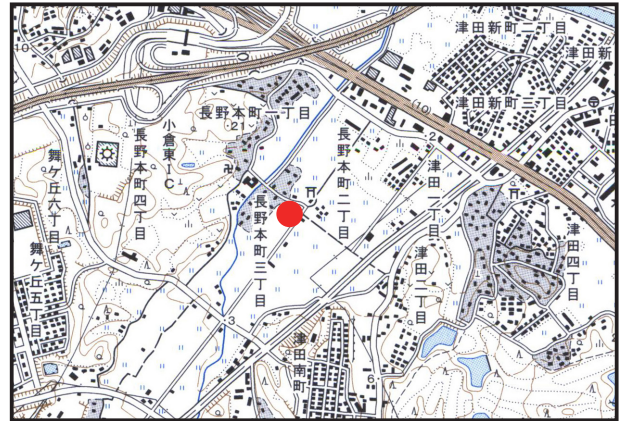
縄文から弥生へ

農耕開始期の土器と石器
—屋敷遺跡第2地点 1・2区の調査から—

1. はじめに

屋敷遺跡第2地点は、小倉南区長野に所在している遺跡です(第1図)。発掘調査では、縄文時代晩期(終わり頃)から弥生時代前期の洪水によって埋没した自然流路を検出し、この洪水堆積層からは同時期の土器や石器が大量に出土しました(第2図)。また、洪水が落ち着いた後の自然流路には、2000本を超える矢板や杭が打ち込まれていました。

本展示では、縄文晩期から弥生前期の土器や石器を中心に、長野地域の縄文から弥生への移り変わり、その後の景観を考えていきたいと思います。



第1図 屋敷遺跡第2地点 位置図(1/25,000)

2. 洪水堆積層から出土した土器と石器

調査区の全域に亘って検出された自然流路(第3図)は、幅約14.8m、深さ約1.1mを計り、大量の砂と流木等が流された状態で出土しました。土器や石器はこの砂や流木に巻き込まれた状態で出土しています。

出土した土器は、主に縄文晩期の深鉢・浅鉢や朝鮮半島系の孔列文土器、弥生前期の甕・大中小の壺(第4図)・鉢(円弧文を持つ)や土錘等が混在した状態で出土しています。これらの土器は、土器の表面に施された文様や、煮炊きによって発生した煤が非常に良好な状態で残っており、洪水の際にすぐ近くの集落(第2図上の宅地辺りや上流付近)から流されてきたため、摩耗が少ないものと考えられます。また、さらに古い縄文前期・中期・後期の土器等も少量出土しています。

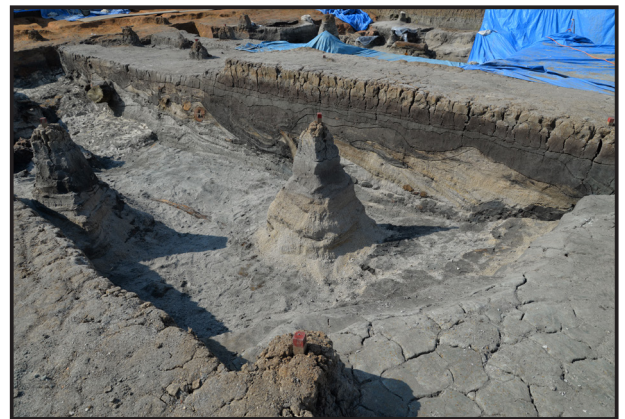
特に弥生前期の土器群は、これまで北九州市内の調査で出土したものと比較しても、トップクラスの質と内容を備えています。北九州市域の弥生時代を考える上で非常に貴重な遺物です。

出土した石器は、打製石斧・扁平打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・凹み石・石錘・石鏃・黒曜石の石核等で、生業に必要な道具が一揃い確認されています。

出土した土器の中で最も新しい時期を示す土器から、この自然流路を埋没させた洪水が弥生時代前期に発生したことが分かり、調査区の周辺に存在したと想定される当時の集落を洪水が襲ったものと考えられます。



第2図 屋敷遺跡第2地点 全景写真(青線が流路)



第3図 自然流路の土層写真(南東から)

3. 洪水後の流路に設置された矢板列と杭列(第5図)

弥生前期頃の洪水が落ち着いた後も、自然流路は小川のような状況で機能していたと考えられます。この時期の流路は、幅約9m、深さ約0.2～0.7mを計ります。流路の下面は洪水によって堆積した砂で、この砂層に2000本以上の杭や矢板(板の先を尖らせたもの:第6図)を打ち込んだ何らかの護岸土留めや、漁撈活動に伴う鰻(杭や板などで壁を作り、行き止まりに魚を誘導する施設)と想定さ



第4図 弥生時代前期の壺 出土状況

れる遺構が構築^{こうちく}されていました。

弥生時代前期頃の長野地域では、こうした流路等を利用して、農耕や漁撈が行われていたものと考えられます。

4. 古墳時代から中世の遺物・遺構から見た景観

ここからは屋敷遺跡第2地点の調査から分かる弥生時代以降の状況を見ていきたいと思います。

本遺跡では、古墳時代前期から中期にかけて弱い洪水に見舞われながらも、徐々に丘陵側からの土砂堆積^{どしゃたいせき}によって陸地化^{りくちか}が進行し、古代・中世にかけて、長野荘の水田になったものと考えられます。

古墳時代では5世紀中頃から後半頃の須恵器が多く出土しており、溝跡や祭祀遺構（土師器の甕や壺と破碎した須恵器の大甕を撒いた遺構：第7図）も確認されています。

奈良時代や平安時代の遺物で特筆されるものが、古代瓦や緑釉陶器です。この古代瓦は、1・2区だけでも120点以上出土しており、この瓦の中には表面に「門司」銘のタタキや、花の文様、格子目タタキを施されているものが多数確認されました（第8図）。長野地域ではこれまでしばしば「門司」銘の古代瓦が確認されていますが、今回の調査でも大量に出土しています。

鎌倉時代以降の遺構や遺物は少なく、調査区が居住域ではなかったものと思われます。隣接する丘陵側（第2図上側のオレンジ色の地面部分）では、中世（12～13世紀頃）の土坑が1基検出されていることから、現在の住宅地と同じ場所に集落が存在したのと考えられます。

5. おわりに

以上のように屋敷遺跡第2地点1・2区では、縄文時代晩期から弥生時代前期に起きた洪水によって埋まった自然流路から土器や石器が大量に出土しました。調査区内では確認できませんでしたが、周辺にはこの時期の水田や集落が存在している可能性が非常に高いと考えられます。

出土した土器群からは、当時の長野の人々が縄文系土器と弥生系土器の両方を使用していた可能性を示しています。当時とは大きく異なりますが、現在も広がる長野の田園風景を、弥生人達も見ていたのかもしれません。

また、なぜ「長野」の地に、「門司」銘を持つ古代瓦が出土するのかについては、今後検討していく必要のある課題です。これらは古代以降、長野の地が「長野荘」として荘園化すること、そしてその中心部が屋敷遺跡の周辺に存在した可能性を物語っているものと思われます。

※この見解は、令和4年4月時点のものであり、今後変わる可能性があります。

埋 蔵 文 化 財 通 信

埋蔵文化財調査室では、令和4年度にも発掘調査が予定されています。

また、最新の発掘情報もホームページで公開しています。イベント情報なども随時公開していますので、是非ご覧下さい。

なお、イベント情報は、市政だよりでもお知らせしております。合わせてご利用下さい。



第5図 SD12 矢板列2 検出状況（南東から）



第6図 斧によって加工された矢板の先端部分



第7図 古墳時代の祭祀遺構 SR01



第8図 出土した古代瓦の拓本詰め合わせ
「門司」銘・花文・格子目タタキなど

公益財団法人北九州市芸術文化振興財団

埋蔵文化財調査室

〒803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目1-3

TEL (093)582-0941 FAX (093)582-8970

北九州市市民文化スポーツ局文化企画課

〒803-8501 北九州市小倉北区城内1-1

TEL (093)582-2391 FAX (093)581-5755

発行日 令和4年4月19日

ホームページアドレスURL ↓

<http://www.kicpac.org/bunkazai/> 検索